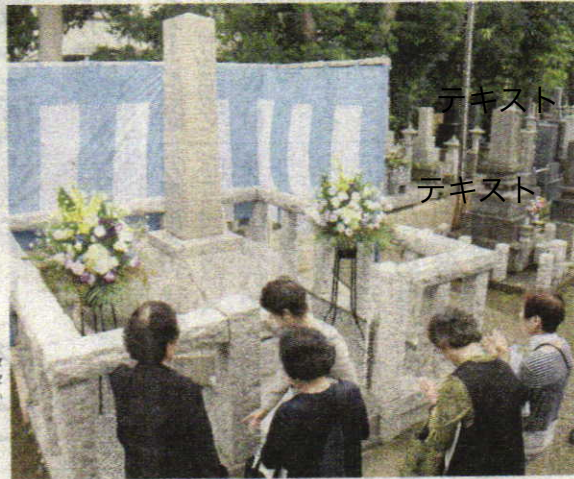


希代の美術史家しのび

本瑞寺 岩村透の百回忌



岩村の墓前で手を合わせる関係者ら

本瑞寺

【三浦】美術批評で日本美術界の発展に先駆的な役割を果たした岩村透（1870～1917年）の百回

忌法要が9日、菩提寺の本瑞寺（三浦市三崎）で執り行われた。遺族や学術関係者ら約120人が参列し、

三崎を愛した美術史家をしのんだ。

岩村は東京出身でフランスなどに留学後、東京美術学校（現・東京芸術大学）の初代西洋美術史教授に就任。著書「巴里の美術学生」（1903年）は若い画家たちに影響を与えたほか、雑誌「美術新報」などの編集に携わり、美術ジャーナリズムの振興にも注力した。三浦半島の美しさにひかれ、12年夏ごろに三崎に別荘を建設。療養生活を送り、47歳で亡くなった。

法要で洞外文隆住職（78）が「先生がこの寺に眠っていることは大きな誇り」とあいさつ。岩村の孫で施主

の岡添正さん（96）は「花を大変愛した人だったので、墓の周りなどを花で飾って下さり、故人も感謝していると思う」と話した。

岩村の研究を四半世紀続ける東京大学大学院の今橋映子教授（55）が功績を紹介し、「今こそ覚えてもらい、未来の遺産として残ってほしい人」と強調。岩村が三浦半島南部沿岸を「南欧の趣がある。近所に伊太利（イタリア）がある」とした逸話にも触れた。

交流のあった画家らが10年忌の際に追悼で奉納した作品群「岩村文庫」（同寺所蔵）なども公開された。

（鴻谷 創）



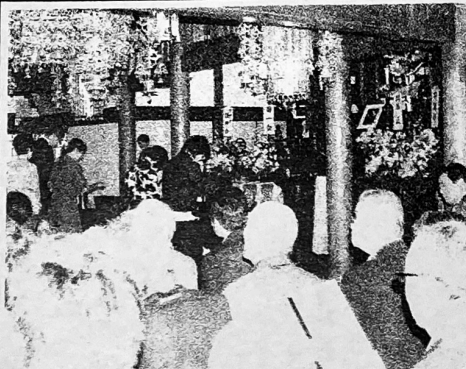
発行所 三崎港報社
三崎市三崎4丁目1番5号
郵便番号 238-0243
電話(881)5245番(代表)
購読料 1ヶ月1800円 1部70円
定 1ヶ月3500円(前 訂)
営業広告1段1センチ 700円
特別広告 別規定による
(広告料はすべて前納)

西洋美術史研究 岩村透の百回忌法要しめやかに
美術批評先駆者

外出 門不 岩村文庫公開

市内外から120人参列し生前想ぶ

【一部既報】19〜20世紀の西欧美術史研究と美術批評の先駆的存在で、「明治大正期美術界の仕掛け人」と評される岩村透の百回忌法要が9日日本瑞寺(市内三崎1丁目)で営まれ、法要の後、記念講演会が開かれた。岩村は1917年糖尿病に倒れて47歳で亡くなったが、東京美術学校(現・東京芸術大学)の初代美術史教授を務め、授業として



法要では読経に続いて参列者が次々と焼香した

の美術を教えるのではなく、画学生たちに西洋美術の最新情報を伝え、独立精神を鼓舞したとされている。約120人が参列した百回忌は同寺・洞外文隆住職と岩村の孫にあたる岡添正氏(96)が施主を務めた。岩村の親戚などで組織された菊一会、岩村の研究を続けている東京大学大学院教授・今橋映子氏らの人力で実現し、読経の後参列者が焼香した。

岩村は晩年、思想統制をしようとした美術学校と衝突し、同時に当時は不治の病といわれた糖尿病を患い、病を癒すため偶然訪れた三浦半島の美しさに強く惹かれ当時の白石町に別荘を建て、隠遁の地とした。生前、岩村の著書「巴里の美術学生」は日本人の若き画家たちがパリへの憧憬を深めるきっかけとなり、永井荷風やパンの会の画家たちに直接的な影響を与えた。また、「美術新報」や「美術週報」の雑誌の編集や執筆を通じて政府や企業家たちに美術の保護、美術行政のあり方を熱く語りかけた。さらに、社会や一般には美術の必要性や新しい美術のあり方を伝えていった。洋画家・黒田清輝、久米桂一郎とともに「美校の三羽鳥」と呼ばれた名物教授で、盟友・森鷗外がその姿を小説に遺すほど重要な存在だった。岩村の死を悼んだ黒田は「あ



法要の後展示された岩村文庫の貴重な資料

たかも自分たち仲間の中の最も高い木が、ある日急に伐採されたかのような喪失感である」と述べている。彼の死後、友人や美術家仲間が法要を営んだほか、境内山門近くの銅像建立や記念講演会、追悼集刊行など様々な行事を通じて遺徳を偲んできた。今橋映子氏が三崎を愛した美術史家・岩村透・岩村文庫という遺産」と題した記念講演会が開かれた。

同寺で保管されている岩村ゆかりの書や絵画などを集めた通称・岩村文庫は普段は非公開で、法要に訪れた関係者だけに公開された。大正15年の岩村十回忌の開催と来場を呼びかけた布製ポスターなどが展示され、関心を集めていた。法要の後、洞外文隆は「境内に眠っているのは寺の誇りでもある

機会あるごとに墓に詣で、寺を愛がっている」となどと挨拶。施主の岡添さんは「本人も多くの方に感謝しているのではないかな」と謝辞を述べた。

また、三浦市を代表した吉田英男市長は「功績がある著名な方のご功績を多くの人に伝える責任がある」となご語り。菊一会の関係者は東京から貸し切りバスで同寺を訪れた。

文化往来

仕掛け人（今橋教授）。欧米への緑地保存にもかかわった。

留学を経て帰国、東京美術学校（現 48歳で亡くなった後は美術家仲

・東京芸術大学）で美術史の初代間が五十回忌まで法要を続け、十

教授を務め、「美校の三羽鳥」と年忌には藤島武二、石井柏亭らが

呼ばれた黒田清輝、久米桂一郎と岩村のために制作した作品を奉

の百回忌法要が9日、神奈川県三 西洋美術の普及に尽力した。森鷗 納。同寺が「岩村文庫」として所

浦市三崎の菩提寺 蔵する作品群も9

・本瑞寺で執り行 日、90年ぶりに1

明治・大正の美術史家、岩村透の百回忌

外と親交を深め、小説「かのやう 日限りで公開された。思想の自由

に」では森の分身である主人公を が失われつつあった社会状況の中

叱咤激励する人物のモデルになっ で教職を失い、まもなく無念の死

た。若手芸術家の作品発表・販売 を遂げたため忘れられたが、「今こ

の場として百貨店を活用。「都市 そ、未来への遺産として記憶し続

の美観は美術の範疇」として東京 けた人物」と今橋教授は話す。

明治・大正期の男爵で美術史家

の岩村透（1870～1917年）

の百回忌法要が9日、神奈川県三

浦市三崎の菩提寺

・本瑞寺で執り行

われた。25年以上、岩村を研究す

る今橋映子・東京大学教授の呼び

かけて同寺などが主催。遺族や地

元の関係者、日本近代美術の研究

者ら約130人が集った。

岩村は「明治大正期の美術界の